

小島千佳「二つに一つ」(「あるかいど」63号)は、埼玉の田舎町にある深夜の一室を舞台に、情事後に男性客へと語りかける水商売(おそらく、スナック)を営む女性の声を綴った作品です。神戸出身で離婚歴のある語り手の「あたし」は、店の客であるオダちゃんとはベッド上で会話を交わしていますが、深夜の地震をきっかけに、以前勤めていた店のオーナーから復興途中の仙台に招かれていることを漏らしません。やがて、オダちゃんが寝入ってしまったあとも、「あたし」は自分の歩んできた人生を思い返し、高校三年生で経験する事になった阪神淡路大震災当日の出来事をひとり語っていきます。

新同人雑誌評

加藤有佳織

小島千佳「二つに一つ」(「あるかいど」63号)は、埼玉の小さなクラブのママが、なじみ客のオダちゃんに聞かせる寝物語です。不眠症だと言う彼に、自分も同じだと応え、ママは朝まで起きていようとおしゃべりを始めます。途中でオダちゃんは眠りつきませんが、彼女は一人、「自分で何かを決めたことなんてない」半生を語ります。生まれ育った神戸での生活や親友アサとの思い出、母の死、阪神淡路大震災、校内で窃盗を疑われた苦い体験。その後誘われて東京そして埼玉へ移った彼女は、今は仙台国分町の店に呼ばれています。どうするか決めかねたまま夜は明け、オダちゃんを起こすのです。震災の影のなか、どちらを選んでも同じかもしれないと諦観しつつ生きる彼女の語り口はとてもチャーミングです。

作品の後半は明確に構成された話になっていることもあり、水商売を営む現在と、私立女子高に通っていた過去とが断裂されている印象を受けました。そしてその断裂の感覚は、翌週にも福井へと去ってしまうオダちゃんとの割り切った関係性や、地震によって二度と戻らない形で壊れてしまう日常など、作品のテーマのひとつになっているように思えます。黒木という生徒をいたぶる男性教師の造形が見事でしたが、読後に残ったのは、窓から早朝に灯りをつける駅のホームを見て安心する「あたし」が手放すことのなかった微かな希望のようなものでした。

「文藝界」への推薦作 ● お二人の討議の結果、推薦作は、真鍋孝「バーバラ」(「パベル」創刊号)、小島千佳「二つに一つ」(「あるかいど」63号)、澤田展人「インフルの丘」(「遺通通信」第2号)の三作となりました。

